



論理的思考力と文学

信州大学教授 藤森裕治

論理的思考力とは、主体が考えたことや感じたことを、冷静にかつ客観的に、筋道を立てて表現したり理解したり評価したりする力をさします。この力は、ふつう感情や感覚で物事をとらえる営みと対照的なものと考えられているようですが、大きな誤解です。なぜなら、論理的思考力は豊かな感性やこまやかな情緒と共に育成されなければ、無意味だからです。なぜ無意味かというと、論理的思考力で最も重要なのは、いかに筋道立てて考えるかという問題よりも、どんなメッセージをどんな目的や意図をもって伝え合おうとするかにあるからです。いくら論理的でも、その

ねらいが相手を騙したり陥れたりすることにあつてはならないのです。それゆえ、論理的思考力の育成に際しては、他人の痛みを我が事のように感じる心や、美しい情景に思わず目がとまる心が求められるのです。そういう心はいかにして育てられるのか。この問いを立てたときにあらためて価値を再発見することになる素材が、文学的文章です。子どもたちが論理的に考えようとするとき、その目的と内容は、人間として美しいものでありたい。光村の国語教科書が文学を大切にしている理由は、こういうところにあります。

「かげおくり」って遊びをちいちゃんに
教えてくれたのは、お父さんでした。



最後のかげおくりは、ちいちゃんにとっては幸せなかげおくりだったかもしれないけど、読んでいる僕たちにとっては悲しいかげおくりだ。ちいちゃんがうれしそうにすればするほど、悲しさでいっぱいになる。(児童の感想)

小さな谷川の底を写した、
二枚の青い幻灯です。



五月の魚の死は「奪う死」だけど、十二月のやまなしの死は、「周りを豊かにする恵みの死」、「生に向かう死」だと思う。(児童の発言)

光村の文学

——ここには、心を揺さぶる何かがあるのです。

「これから先、どんなときでも、
ぼくはおまえといっしょだよ。」



白馬は馬頭琴になって、ずっとスーホといられるようになったんだね。(児童のつぶやき)

心をこめて、しっかりしっかり、
わらを編んでいきました。



「わらぐつの中の神様」を読んで、物も人間も見た目ではなく、中身が大切だと分かった。(児童の感想)

「これは、レモンのにおいですか。」



「お日さまの色をそめ付けたような」という夏みかんの色は、とても暖かい感じがする。お母さんや松井さんのあったかい気持ちが詰まっているから、このお話には夏みかんがびったりなんだと思う。(児童の感想)

「天まで とどけ、一、二、三。」



本当に「くじらぐも」に乗ったつもりで、見えるものが豊かな言葉になって出てくる。教師が苦労せずとも、子どもたちが自由に物語の世界で遊べる。(教師の感想)

「わらぐつの中の神様」 杉みき子

- 1930年,新潟県生まれ。
- 「日本児童文学」に発表した短編「かくまきの歌」ほかで日本児童文学者協会新人賞,「小さな雪の町の物語」で小学館文学賞,「小さな町の風景」で赤い鳥文学賞を受賞。作品に,「雪の下のうた」「月夜のバス」など多数。

「ちいちゃんのかげおくり」 「白いぼうし」 あまんきみこ

- 1931年,旧満州生まれ。
- 与田準一との出会いが,創作活動のきっかけとなる。「車のいろは空のいろ」で日本児童文学者協会新人賞と野間児童文芸推奨作品賞,「ちいちゃんのかげおくり」で小学館文学賞を受賞。作品多数。

「お手紙」 アーノルド=ローベル

- 1933-1987年,アメリカ生まれ。
- 「ふたりはいっしょ」でニューベリー賞,「どうぶつものがたり」でコールデコット賞等,多数の賞を受賞している。20世紀アメリカを代表する絵本作家の一人と評されていて,日本でも約40作品が出版されている。

「スイミー」 レオ=レオニ

- 1910-1999年,オランダ生まれ。
- 29歳でアメリカに渡る。イラストレーター,グラフィックデザイナー,絵本作家として活躍した。絵本作家としては,1959年「あおくときいろちゃん」でデビュー。日本では,約30作品が出版されている。

「くじらぐも」 中川李枝子

- 1935年,北海道生まれ。
- サンケイ児童文化賞,厚生大臣賞,NHK児童文学奨励賞等受賞。1963年に誕生した「ぐりとぐら」シリーズは,約1,500万冊発行されている。世界10か国で出版され,海外版でも累計27万部以上のベストセラーとなる。

「大造じいさんとガン」 椋鳩十

- 1905-1987年,長野県生まれ。
- 鹿児島県に教員として赴任し,作家活動を始める。その後,鹿児島県立図書館の館長として,「母子20分間読書運動」を提唱し反響を呼ぶ。文部大臣奨励賞,国際アンデルセン賞国内賞,赤い鳥文学賞等受賞。

「ふきのとう」 工藤直子

- 1935年,台湾生まれ。
- 「てつがくのライオン」で日本児童文学者協会新人賞,「ともだちは海のにおい」でサンケイ児童出版文化賞,「ともだちは緑のにおい」で芸術選奨文部大臣賞新人賞を受賞。作品に,「のはらうた」「あいうえおおかみ」など多数。

「モチモチの木」 斎藤隆介

- 1917-1985年,東京都生まれ。
- 雑誌,新聞記者を経て,NHK秋田放送局の台本を執筆。このころ,版画家滝平二郎と知り合う。帰京後,処女童話集「ペロ出しチョンマ」で小学館文学賞を受賞。作品に,滝平と組んだ「八郎」「花さき山」など多数。

「一つの花」 今西祐行

- 1923-2004年,大阪府生まれ。
- 高等学校在学中より創作活動を始める。大学在学中,学徒出陣で海軍に入隊。原爆投下直後に救援隊として広島に赴く。最初の童話集「そらのひつじかい」で日本児童文学者協会新人賞を受賞。作品多数。

「ごんぎつね」 新美南吉

- 1913-1943年,愛知県生まれ。
- 1931年,小学校の代用教員となる。「ごんぎつね」は,1932年,雑誌「赤い鳥」に「ごん狐」として掲載された。南吉19歳のときである。結核により,29歳の若さで亡くなった。作品に,「手ぶくろを買いに」など。

「やまなし」 宮沢賢治

- 1896-1933年,岩手県生まれ。
- 稗貫農学校の教諭をしながら,詩集「春と修羅」,童話集「注文の多い料理店」を刊行。没後,ほとんど未発表のまま残された膨大な作品草稿が,弟清六氏らの尽力により整理,発表され,評価された。

「黄色いバケツ」 森山京

- 1929年,東京都生まれ。
- 「きつねのこシリーズ」で路傍の石幼年文学賞,「あしたもよかった」で小学館文学賞,「まねやのオイラ旅ねこ道中」で野間児童文芸賞を受賞。作品に,「パンやのくまちゃん」「あやとりひめ」「いきてよ」など多数。

「いろはにほへと」 今江祥智

- 1932年,大阪府生まれ。
- 「海の日曜日」でサンケイ児童出版文化賞および児童福祉文化賞を,「ぼんぼん」で日本児童文学者協会賞,「ぼんぼん」四部作で路傍の石文学賞を受賞。作品に,「優しさごっこ」「ひげがあろうがなからうが」など多数。

「カレーライス」 重松清

- 1963年,岡山県生まれ。
- 編集者を経て,現在,作家として活躍。1999年,「ナイフ」が坪田譲治文学賞を,「エイジ」が山本周五郎賞を受賞。2001年「ビタミンF」で直木賞受賞。作品に,「日曜日の夕刊」「きよしこ」「青い鳥」など多数。

「新しい友達」 石井睦美

- 1957年,神奈川県生まれ。
- 「五月のはじめ,日曜日の朝」で新美南吉児童文学賞を受賞。2003年,「駒井れん」の筆名で朝日新人文学賞を受賞。作品に「卵と小麦粉それからマドレーヌ」「群青の空に薄荷の匂い」「すみれちゃん」など多数。